

奥多摩の森



奥多摩

《第32号》

平成26年1月15日
奥多摩観光協会



木原國 安藤修二

新年のあいさつ

明けましておめでとうございます。皆様には良い年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は暑い日が続きましたね。その分、秋が短くなりましたが、見事な紅葉が見られました。

登山者や行楽客も昨年よりも多かったように見受けられました。

登山者が山で滑落や、川で水の事故もありました。奥多摩の山や川は地形も荒く危険なところも多く、ケガや時には死に至る事も多くあります。登山や川での水遊びには、十分な装備しっかりした計画のもとに奥多摩に来てください。

山で遭難や川での事故には、警察や消防署の山岳救助隊が出動し、遭難者を救助します。事故のない山行、行楽を楽しんでいただきたいです。

そして、山行には是非、登山者カードの提出をしてから登山をしてください。万が一事故の時には、

その登山者カードが必要となります。奥多摩に着いてから行き先を変更し、登山者カードを出さずに、行方不明になる方もおります。以前にありましたが、川乗山に登ると家の者に話し、奥多摩に着いてから行き先を変更し、次の日にも帰宅しないので、家族が心配して捜索願いを出し、警察の山岳救助隊の方が一週間以上、川乗山周辺を捜しましたが見つからず捜索を打ち切りました。数年してから見つかったのは水根沢でした。このようなことのないように、楽しい奥多摩を堪能してください。

皆様の本年が実りある良い年でありますようお願いいたします。

(一般社団法人奥多摩観光協会・会長 鈴木賢一)

～ 冬のおきの山歩きガイド ～

冬の雲取山

2013.1.16 冬の雲取山は初めてです。何処からアイゼンかなと思いつつもワクワクしています。幸いにして小袖乗越付近まで車で入ることができ、1時間は時間を稼ぐことができました。

6:30 小袖登山口より登り始めました。雪はそれ程でもなくトレースもあり大分捗ります。7時過ぎ登山道にも朝日が射してきました。日の光は本当に暖かく感じます。1枚脱いでもまだ汗が出ます。

スノーシューで下った跡があります。夏山の登山道しか利用したことがないのであまり気にしなかったのですが、結構、雪もあり楽しい経験です。天気が良いので本当にラッキーなことです。

セツ石山への分岐からブナ坂までの、巻き道の長いこと長いこと。セツ石山を登ったほうが楽なのではと思われるくらい。やはり雪の所以。この巻き道は、雪がかなり深かったです。

10:40 過ぎブナ坂へ到着。ここからは見晴らしがよくなります。周囲のほとんどが落葉していて夏よりも見通しが更によくなっています。

日原・倉沢林道歩き

奥多摩駅発 10時15分のバスで出発。日原方面へは本数が少ないのでご注意ください。20分程で倉沢バス停に着き、倉沢林道をたどる。

右岸の崖からの湧き水が多く、歩くのも大変だ。宮下橋から始まって八幡橋、鳴瀬橋、魚留橋へと登って行く。進行右下の流れは、水量豊かで魚釣りに結構おもしろいのではないだろうか。魚留橋までの間に50余りの滝があるそう。八幡橋では左の崖の上から勢いよく滝が落ちている。1時間30分程で魚留橋に着く。少し手前で右上に巨大な白いドームが見える。倉沢鍾乳洞がある石灰岩峰だろう。魚留橋はロープが張ってあり現在通行止め中で、ここで昼食休憩。前面には、魚留滝が豪快に落ちている。このコースは、トイレがないのでご注意ください。

倉沢バス停まで緩い下り坂を1時間程かけて下る。バス停より15分登りの倉沢のヒノキを見て、その奥の旧倉沢集落跡にまわる。倉沢集落は、鎌倉時代

天候も青空が広がっていて展望が期待できます。遠くに雲がありますが、山々は、よく見えて素晴らしい眺めです。周りの木々には雪はなく、雲取山への広い道を白い雪がつくっています。

いよいよなだらかに続く尾根歩きとなります。2つの小さな急坂を越え、ヘリポート、奥多摩小屋へ着きます。この付近の風による雪の造形には本当に素晴らしいものがあります。ヘリポートには、雪はなく芝生に覆われているようです。

奥多摩小屋を出て小1時間、小雲取山の急坂を登りきると避難小屋が見えてきました。小気味よい歩きです。小屋は目の前。避難小屋へ着きました。寒暖計は摂氏零度。ザックを置いて頂上へ。13時前に到着。アイゼンをつけず、結構時間を要しました。

雲取山の周辺は快晴。しかし、富士山は薄雲に隠れて見ることはできません。アイゼンをつけて14時前下山開始。登山口18:00 帰着。「喫茶・山鳩」でおいしいケンチン汁をご馳走になり、送っていただき帰宅。楽しい1日でした。(西原潤治)

から坂和一族が住みついて、その後石灰産業の隆盛で200人程が暮らしていた所で、今は廃村になってしまっている。倉沢バス停15時06分の奥多摩駅へのバスに乗って帰る。

天候に恵まれれば、快適な林道歩きとなります。特に、春は新緑、夏は涼しく、秋の紅葉は格別です。(杉浦重明)



～「奥多摩四季」その4～

「富士浅間信仰の路」

今年日本人の心の山、富士山がユネスコの世界文化遺産リストに登録された。日本政府は当初富士山を自然遺産での登録を目指していたのだが、ゴミやし尿の問題が解決できず、文化遺産に変更し推薦していたものが、今回の登録となったものである。

日本人の美しい心のシンボルとして雪舟や探幽、北斎や広重、富岡鉄斎や横山大観、梅原龍三郎などが絵画芸術として昇華させた。文学でも万葉の時代から詩歌に詠まれ、赤人や西行の和歌、草野心平の詩、太宰治の小説「富士には月見草がよく似合ふ」という名文句となり、富士山は日本独特の芸術文化を育んできたのである。

そしてまた、富士山のその秀麗な山容は原始古代からの山岳信仰の対象であった。富士山頂に「浅間大神」とされる天照大神と、天照大神の孫瀬織雲能命の妃、木花開耶姫が祀られ、また神仏混淆で問う天照大神は化身して大日如来として祀られている。

平安時代にはすでに入峰行者の群れが見られたという。それが富士浅間信仰となり、富士講として江戸期に黄金時代を迎えたのである。

旧暦の6月から7月が富士山の開山期であった。その季節になると富士山北口には先達に率いられた信者の群れが列をなしたという。その服装は白衣の行衣姿で、菅笠、手甲、脚絆にわらじばき、金剛杖を持ち、御師・先達の指導で鈴を振って、六根清浄を合唱しながら登山をした。一夏で何万もの信者の群れが白衣一色で登山道を登るさまは、まさに壮観そのものであったことだろう。

現在、多くの登山者を迎えている奥多摩の山々も古くから、特に江戸時代に北関東あたりから富士山を目指したという富士講の路（権現の路）の要衝であった。山頂や尾根、沢などに今も浅間の名が多く残り、浅間神社も到るところに祀られている。

北関東から秩父を経て奥多摩に入る権現の路は大きくふたつが知られている。そのひとつは秩父から日本武尊が祀

られる三峯神社を詣で、三峰三山である妙法ヶ嶽、白岩山権現、雲採（取）山を越え、さらに石尾根を七ツ石明神、鷹ノ巣山手前から浅間尾根を小河内原の湯之権現へと下る。湯場でゆっくりと疲れを癒した富士講の一行は、さらに大菩薩嶺から塩山へ、あるいは松姫峠から大月へと富士吉田を目指したことだろう。

もうひとつに蕎麦粒山の西に位置する仙元峠がある。このピークの仙元は本来浅間であって、浅間大神を遙拝する御旅所とされ小祠が祀られている。

秩父側の浦山川俣にある浦山大日堂に詣でた一行は、この仙元峠に登り上げ、はじめて富士山の全貌を目の当たりにして遙拝したのである。そして足弱な信徒はここで浅間さまを遙拝して帰路に着いたし、遠く富士山参拝を目指す熱烈な富士道者は、先達の指導のもと三ツドツクから道者道と呼ばれた横スズ尾根の両替場、大茶屋を下り、日原にある一石山の御岩屋（鍾乳洞の神格名）、あるいは大日如来像を祀った倉澤の巖窟へと歩を進めたことであろう。

一石山の御岩屋も倉澤の巖窟も、鎌倉時代から富士浅間への御旅所として、また山伏修験者の崇高な道場として栄えたといわれている。一石山御岩屋の奥に胎藏界大日像が水中に安置されており、衆生の苦難を救うとして尊崇され、日々賽箱の賽銭がうず高くあげられていたと言うから、往時の賑わいぶりが分る。参詣を終えた一行は鷹ノ巣山を越え雲取山からの道に合流し、前述のコースを富士吉田に向かうこととなる。

一行の集団は多い時でも15人ほどで、先達に率いられ、まさに奥多摩の峰々を巡遊したと思われる。しかしそれほど隆盛だった富士講も、文明開化以来の新しい風潮に負け、明治に入って衰頹の一途を辿ったという。そして今は奥多摩の山を闊歩する道者の姿は全く見られない。ただ富士登山は世界文化遺産も追い風となり再び大盛況となっているようだ。

遠い山岳信仰の時代に思いを馳せ、ゆっくりと奥多摩の権現の路を逍遥してみるのもいいものだ。

（元青梅警察署山岳救助隊副隊長 金 邦夫）

奥多摩・むかしみちの昔話

発行：奥多摩町教育委員会

協力：奥多摩民話の会

「熊をくすぐる」

むかし、むかし、この辺りには変わった熊猟があったそうです。

熊は冬至の頃、たらふく食いためると、棲穴で翌春までの冬眠に入ります。熊は自分の横穴へ入ってきた者には危害を加えないというので、熊穴の猟は、村の衆にとって、正月前の何よりのかせぎ場でした。ある日、境の猟師が二人連れだつて、栃寄の山へ登りました。

「棒でつついてみんべえか。それともいぶしてみんべえか」「あにい、めんどつくせえ、おらがへえつてみんべえよ」と、伍作さんは仲間の猟師を穴の外へ待たせて、いつでも鉄砲を用意させておくと、「熊公が留守だったら、おらが出てくるけど、間違っても撃つんじゃねえかな」と、よおく念を押して、おっかなびっくり熊の穴へ潜り込んでいきました。真っ暗な中で、熊のにおいと気配で、「いたあ、いたあ」と心の中で声をあげ、手探りで、そっと熊の体をなでまわして、よおく眠っているのを確かめると、「よっこらしょ」と熊のうしろ側までまわりこみました。

伍作さんは奥の壁に手をかけると熊の体をけつておっぺしてみましたが、何しろ、でっけえずうてえなので、びくとも動きません。そこで熊の体を一杯くすぐるようになでまわしました。

「うへっ、やめてくんろ」と、言ったかどうか、くすぐったくなった熊は、次第に穴の出口へ押し出されるかたちで、モソモソと出ていきました。そして、「これはよし」と、見はからうと、仲間の猟師がズドンと見事に撃ちとめました。

今では、さすがに伍作さんのような命知らずはいなくなりました。

追記

昔話の冊子は、観光案内所にあります。

本は、荒澤屋、水と緑のふれあい館にあります。

「西久保の天狗さま」

むかし、むかし、西久保には、天狗山という小高い山があって、この山には、天狗さまが棲んでいた。

日が暮れるころになると、村人をおどかしたり、積荷を背負った馬を追いとばして、馬方衆を困らせたものだから、夜などはこわくて、人通りも絶えたという。でも、ときには村人の目を楽しませてくれることもあった。

それは月の出ない夜に、天狗さまは鼻をずんずんと長くのばして、水根の大橋から中山の大橋までむすんで、それへずらつと提灯をかけた。まるで、提灯の橋がかかったようで、それはみごとなもんだつた。「天狗さまの提灯がかかったぞー」と叫ぶ村人の声が、谷間にこだますると、どの家からもみんな飛び出して「みごとなもんじゃあ」

「天狗さまも、たまにゃ楽しませてくれるわい」と見ほれた。

それでも、なお悪さをする天狗さまに困った村人は、隣村に相談をぶつて、

「天狗さまの祠をつくつて、お祀りしたらよかんべえ」ということになった。

お祀りしてからは、天狗さまも落ちついたものか、姿を見せなくなった。

やがて、小河内ダム工事が始まると、天狗山も崩されて、広い原っぱになり、天狗さまは上の山の浅間神社に大事に移された。

今では天狗さまも、尾根の上から湖や自分が棲んでいた辺りを見下ろしながら、道行く人の安全を見守っているということだ。



奥多摩昔語り

奥多摩町の年中行事 7

正月行事つづき

14日 せいの神まつり (塞の神まつり)

各家の取払った松飾や太薪(せいとう木)を集めて、道祖神の前へ積上げ、日暮を待って火をつけると夜中まで燃え続けました。

昔は、どこの集落でも行っていた行事でしたが、現在、奥多摩町内では、「川野のどんと焼き」だけとなりました。川野の集落は、小河内貯水池工事により、現在地に移転した後、自治会が中心となって「せいのかみまつり」を復活させたものです。会場はバス停留所「中奥多摩湖」横の駐車場です。当日は、うず高く積上げられた「せいとう木」に火がつけられると、参加者は火の周りを遠巻きにして、長い枝の先につけた団子をあぶり、こんがり焼けた団子を食べます。昔から、この団子を食べると風邪にかからないという言い伝えがあり、毎年そのようなことをいながら皆で食べます。道祖神は、自然石に文字を刻んだ造塔が多く、村境や集落境に祀られていて、その地域へ悪霊・疫病などが入り込まないように守ってくださる神様といわれています。又、安

産の神様・子供の神様として知られています。

旧小河内地区の熱海には、「ジジイ・ババア」と呼ばれている桐の木のタンクル(短い丸太)1対を預かる家があり、地域内の年少の者たちが借りに行きます。「ジジイ・ババア」は、年を経て真っ黒になっていますが、これに半紙を巻いて水引を掛け、集落内の各戸ごとに「ジジイ祝っておくやれ」「ババア祝っておくやれ」といって御祝儀を貰いました。

「おくやれ」という言葉は、「ください」という意味の方言です。又、熱海には、神楽の獅子頭を預かる家があり、こちらの方は、年長の男子たちが借りに行き、「福の神が舞い込んだり、舞い込んだり」といって各家の入口から威勢よく飛びこんで舞狂います。舞方以外は、鉦(かね)を鳴らしたり、はやしたてます。家の者は、悪魔祓いの舞を歓迎して、老人や子供が病気に罹らないように、獅子の口で頭を噛んで貰うこともありました。

しかし、こういう行事も、今は、遠い昔のことになりました。

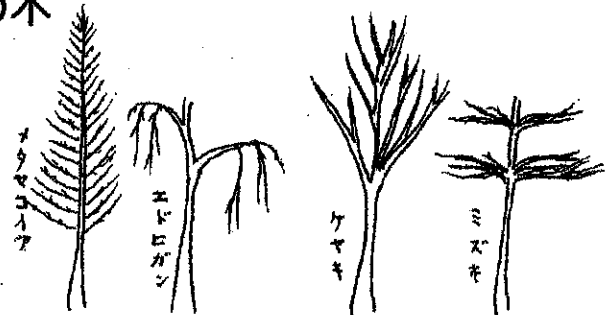
[資料]奥多摩町誌、広報おくたま

(奥多摩郷土研究会会員 岡部 義重)

この木なんの木

樹形が美しい

葉を落とした木々が、身を削ぎ去った時に見せる個性的な美しさ、それが樹形の美しさです。さまざまな種類の木が、冷えびえとした空気に包まれて弧々として佇む姿には、ものさびしさと同時に、その木がもつ毅然とした生のすがたをも感じます。いくつかの木の樹形に目をやってみましょう。メタセコイヤは、円錐形のとんがり帽子の形をしています。常緑のスギ、ヒノキ、モミなどの針葉樹も円錐形です。これは、幹の先端からのホルモンがその下の枝が伸びるのを抑え、抑えられていた枝が次第に伸びていくからです。サクラのエドヒガンは、しだれることが多い種類です。これは枝の中のホルモン[ジベレリン]が少ないと木化が遅れ、柔らかいまま下に垂れるのです。他のしだれる木も同じです。ミズキは幹の頂点にある芽が年に一回数本に枝分かれして、それが水平方向に伸びるので、車輪が段々に重なった樹形になります。ケヤキは両腕を空に向けて挙げた樹形になり、「櫻」という字がつかしました。



常緑樹のカシやシイは、離れて見ると樹の頂き(樹冠)がもこもことした樹形になります。

ちなみに、針葉樹は一億年以上前に地球上に現われ、その後からブナやコナラなどの広葉樹が現われました。ただ針葉樹は形が整い幹や枝を曲げたり分岐させることが苦手(人手によるマツの場合は別)で、光をめぐる広葉樹との競争では不利です。山肌をおおう広葉樹の間に点在するモミの黒々とした樹形には、広葉樹との競争に耐えながら生き続ける力強い美しさがあります。

樹木が一見奔放に枝を伸ばしながら、その種類に応じて個性的な「樹形」をつくっていくすがたを、子ども達が人として成長する姿になぞらえて観ることができます。(橋上一彦)

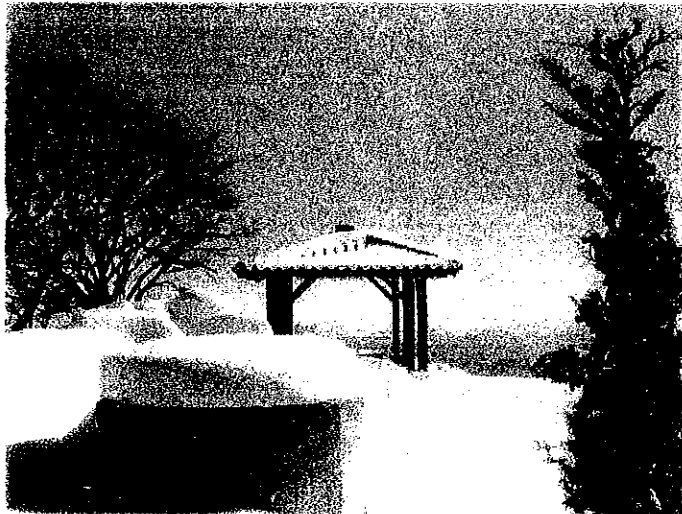
奥多摩

～冬山の魅力と危険～

冬枯れの奥多摩は空気が澄んで展望抜群。真っ青な空のもと、ヴァージン・スノーを歩く醍醐味は、何物にも代え難い。また葉の落ちた樹林では小動物や小鳥たちを間近に見られる機会もあり、そうした出会いも思いがけない楽しみのひとつである。

ひとくちに奥多摩の山歩きといっても、里山から2017mの雲取山までグレードは千差万別である。

毎年、12月～1月中旬に多い西高東低の気圧配置では、降る雪の量もさほど多くはない。しかし1月下旬～3月上旬にかけ急速に発達する低気圧が本邦南岸を通過する際には、関東地方の山々にも大雪をもたらす。それも一晩に30～50cmと、里では考えられない程の積雪となることも珍しくない。



早春の「日の出山」(902m) 積雪約25cm

またこの時季は、昼間の日陽さしで解けた雪が夜に放射冷却で凍結し、特に踏み跡はアイスバーンとなる。これが落葉で被覆されると危険極まりない。靴底の一寸したスリップが、転滑落事故につながり命を脅かす大惨事を招くこともある。低山歩きでも通常の装備に加え6本爪以上のアイゼンを是非携行されたい。

昨年一年間の奥多摩における山岳遭難は50件を超え、過去の記録を更新している。冬の単独登山は自重しその山を熟知した経験者と同行されたい。又、入山にあたっては最新の気象情報は勿論、案内所や登山相談所(奥多摩交番他)・ビジターセンター等で入山域の最新情報を入手し、自己の装備を含め万全を期されたい。魅力に危険がつきものであることを明記して筆をおく。

(富士光男)

施設案内

そば処「蕎麦太郎カフェ」

町役場から西へ北氷川橋を渡り、右折。ここから3分ほどのところに「蕎麦太郎カフェ」があります。氷川国際ます釣場の建物の中です。お勧めは、麦切り。大麥の粉から作り、のど越しがいいので人気メニュー。

これからの季節、暖かい手打ちそばやユニークなカレーがお勧め。食後のコーヒー、紅茶は、セルフで無料というのがうれしい。

所在地 奥多摩町氷川397-1

電話 0428-83-8160

定休日 月曜日(12月～2月) 3～11月は無休

営業時間 11時～16時

平成26年度奥多摩山開き

恒例の山開き式典を下記のとおり行います。ぜひご参加ください。終了後、付近を散策できます。

日時 4月6日(日) 午前8時～9時

会場 奥多摩駅前・大木戸稻荷神社

平成26年度 登山・ハイキング会員募集

奥多摩観光協会では、当協会が主催するイベントへの参加者を募集しています。

26年度会費1,000円で年5回参加すれば、奥多摩温泉「もえぎの湯」の無料券(700円相当)をプレゼントします。

会員登録は、最初に参加するイベント当日に手続を行って下さい。詳しくは、JR奥多摩駅前にある当協会の観光案内所にお問合わせ下さい。

電話 0428-83-2152

次号発行予定：平成26年4月15日

発行：奥多摩観光協会

住所：〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話：0428-83-2152 Fax：0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会